

巻頭言

戸沼幸市 ((一財)日本開発構想研究所代表理事)

グローバリゼーション 大学は世界化にどう向き合うか

21世紀の初頭、日本の大学を取り巻く環境は大きく変わっている。

その第1は、日本社会の少子高齢化の大波の中で、18才人口の激減である。これについては戦後日本の高度経済成長、ベビーブームの波に乗って新設された多くの大学、大幅な定員増を行った大学に定員割れが生じ、大学としてその存立をかけた経営問題に直面していることである。

その第2はグローバリゼーション、世界化の大波に取り巻かれていることである。

日本人の諸活動は発達しつつける交通・情報環境の中で、地球大に拡大し、逆に日本国内へは世界中からの人、モノ、カネ、情報が間断なく流れ込んでおり、日本における教育・知の拠点である大学は改めてこの地球的な人間居住、諸活動の世界化にどう向き合うかが問われている。

日本に現存する有力な大学の多くは19世紀末、それまでの鎖国型の近世日本から、エネルギー・産業革命を実現しつつあった欧米烈強に迫られての開国型の近代日本のかたちづくりに切り換えた時に、誕生した。

近代日本のかたちづくりとは天皇を中心とする国家、国民の統合システムの構築であり、これを支えるための大日本帝国憲法の制定、近代的軍隊の創設、廃藩置県による国の統治制度づくりなどであった。そして、初等、中等、高等教育体制をしっかりと築くことであった。

「大学」は、新しい国づくりを支える人材育成の機関として、当初から明治・近代国家ビジョンの中の重要な柱であった。

まず、明治10(1877)年設立の東京大学(明治19年(1886)帝国大学、明治30年(1897)東京帝国大学)、これに続いて京都帝国大学、東北、九州、北海道帝国大学が誕生した。帝国大学として昭和初期に大阪大学、名古屋大学が加わり、ほぼ国土経営の要として地域に均等に配置された。

帝国大学、特に東京帝国大学は初めから中央政府の役人養成の面が強いものであった。

これに対し、この時期、ダイレクトな国家目的

のために設立された帝国大学の隙間に自由民権など、近代国家に独自のイメージをもつ多くの私立大学が誕生した。福沢諭吉の慶應義塾大学部(安政5年(1858)慶應義塾)、大隈重信の早稲田大学(明治15年(1882)東京専門学校)などである。

これら私立大学は官立公立共々明治・大正・昭和前期を通じて近代国家づくりに分厚い人材を提供しつつきた。この間、教育、学問の内容は進んだ欧米文明をモデルにしたものであり、ヨコ文字(イギリス、フランス、ドイツ語)をタテ文字(日本語)に翻訳することであったともいえよう。

これが鎖国から開国へと向かう日本の大学の国際化、世界化への対応の第1段階である。

世界化の第2段階は第二次世界大戦後である。皮肉なことに戦争は地球地域に息づいていた国々を一挙に暴力的に攪拌し、国際化、世界化してしまう。

昭和20年(1945)、日本は壊滅的敗戦により、帝国主義国家日本は崩壊し、代って、主権在民の民主主義国家を志向した。

戦争放棄の平和憲法を制定し、教育・学制改革などを進めた。

これについてはすくなくならず戦勝国アメリカの大学がモデルであった。新制度として、高等学校、専門学校、実業専門学校、高等師範学校、師範学校が大学となり、日本の大学は国立、公立、私立大学合わせて昭和24(1949)年、178校となった。

敗戦直後の青年達は重苦しい軍国主義から解放されて、新しい国づくりに自己実現の夢をかぶせ、希望に満ちたものであった。

海外への留学者では、アメリカへの留学者が増えた。

若者・青年を含めた日本人の勤勉さによって日本は戦災からの復旧、復興を短期間でなし遂げ、アメリカに次ぐGDP世界第2位(最近中国に抜かれ、第3位になったが)の位置を占める経済大国にまでになった。

この間、日本人の海外留学に合わせて、経済大国日本への中国、韓国、台湾他のアジアからの留学生も増加した。

日本の大学は小資源国日本のものづくり、海外への生産品の販売促進等を下支えし、戦後日本の国際化、世界化に一定の役割を果たした。

戦後日本の高度成長期、大学の国際化、世界化について欠かせないエピソードに1960年代、70年代の「学園紛争」がある。

日本の大学紛争の旗は、当時の閉鎖的な大学の体質批判、安保反対、ベトナム反戦であったが、高度経済成長期の環境破壊に対する異議申し立てでもあった。これとほぼ同時期1968年、フランスではソルボンヌ大学を拠点とする学生・労働者の国家批判、民主化要求運動が「パリ5月革命」と称されて大々的に展開された。

これにはベトナム戦争、プラハの春など国境を越えた国家権力批判が重なっていた。奇しくも中国では青少年の集団、紅衛兵が前面に立った文化大革命（1966～76）が巻き起こっていた。

当時、早稲田大学の助手であった私として、現在ほどの情報伝達手段がないにもかかわらず、世界中の青年が同時多発的につながり合うことに強い印象をもったことが思い出される。これは大学の世界化の20世紀の一断面であろう。

戦後日本の世界大への進出、貢献について、学術、技術、芸術、文化、スポーツ等々、様々な分野において枚挙にいとまがないであろう。

この間大学（国、公、私立）の数は1950年 201校、60年 245校、70年 382校、80年 446校、90年 507校となっている。

この時期、短期大学も大量につくられた。

さて、20世紀末のバブル経済の崩壊後、経済の低成長と少子高齢化の21世紀初頭の日本の現在である。

大学を取り巻く人的環境として第2次ベビーブーマーの大挙しての入学により、1990年507校、2000年649校、2012年783校と、この20年間に100校刻みに階段状に膨らんだ大学に、縮体、再編成が迫られている。

ここに関連して、日本自体も大学もグローバル化の大波を受けている。明治維新の第1波、戦後の第2波に続く第3波の大波である。

現在、大学は生き残りをかけて国際化、世界化に対して様々な試みを行っている。

グローバルをローカル（グローバル+ローカル）と読み替えると地域に具体的場所をもつ日本

各地の大学は、地域づくり、まちづくり、人づくりなど地域の諸問題に多くの貢献が期待される。

この場合、地域にある大学が連合し、その地に係わりのある外国の大学を巻き込んで活動の舞台を整えるといった試みが方々でなされつつある。

特定地域から見る世界像は様々であり、北海道であれば極東ロシア、九州であれば指呼の間にある朝鮮半島とそれに続く中国大陸である。

21世紀の国家、国土ビジョンとして「道州制」の議論が始められているが、これに即して一つのイメージをいえば、旧帝大、国立大学を州立とし、東北州立東北大学、九州州立九州大学、関西州立京都大学、大阪大学、関東州立東京大学などとするのも面白いのではないか。

日本国を背負っての大学としてよりも、肩の力を抜いた国際貢献が期待できるのではないか。

この点で日本の私立大学は21世紀の地球の人間居住のグローバリゼーションの諸場面に存分に力を発揮できるのではないか。

21世紀、地球における人間居住—地球文明は国を超えてダイナミックに変化している。

地球文明—北米、中南米、ヨーロッパ、アフリカ、ロシア、中東、インド、東アジア、オセアニアなどの「おしくらまんじゅう」の中で日本はどんな位置どりをするのか。

東洋の一角の日本列島に築いた日本人の人間居住は古来様々なグローバリゼーションの波を受けつつ、固有の言語を持ち、世界的に特筆すべき独自の文明圏を築いてきた。

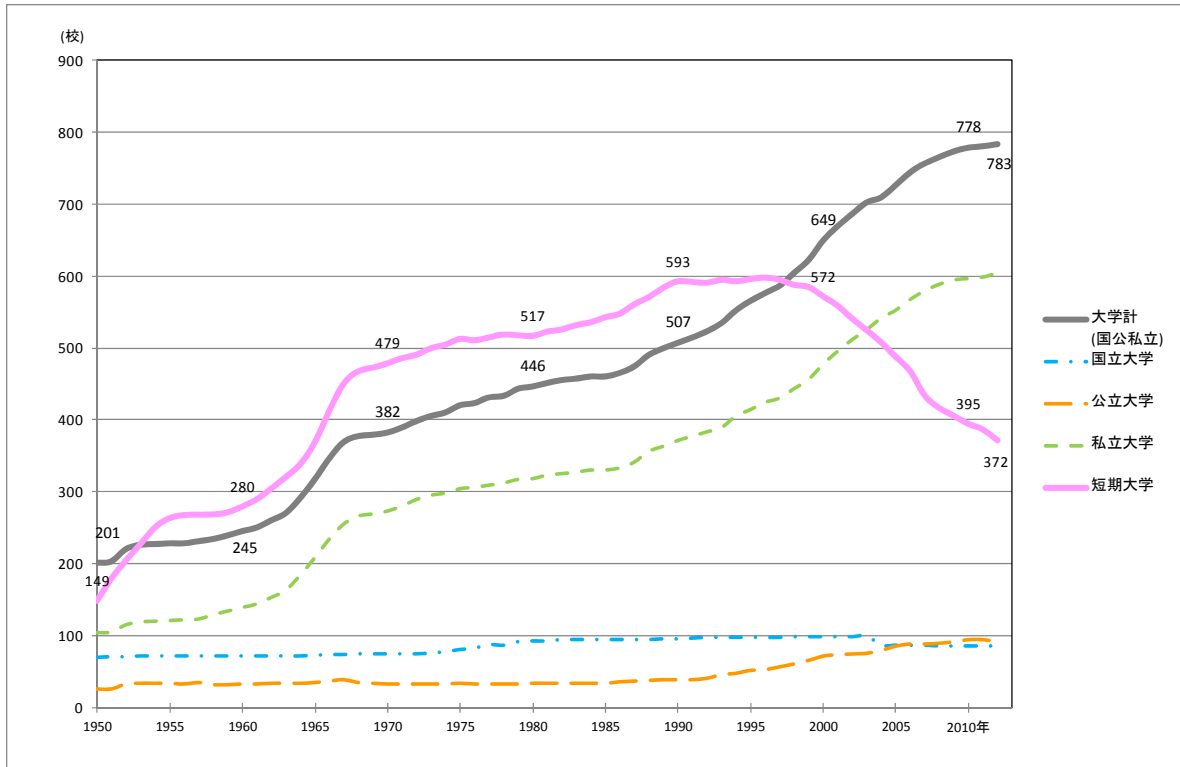
昨今、日本の教育制度の中に地球の共通語として「英語」をいかに取り入れるかが議論されているが、1億人が利用している「日本語」についても国連などで通用する共通語の一つとして主張したいものである。

21世紀におけるグローバリゼーションとはいわば宇宙船「地球号」において、様々な民族の交流交差の中で人類はいかなる人間居住を実現すべきか、ローカル化しつつある現代国家の枠組みを前提に、人類、人間の平和と幸福な地域社会をいかに築くことが出来るかの間であろう。

ここに係るグローバル人材とは広い視野を持ち、世界に立ち向かう“志”、そして“一芸”をもった人々であろう。

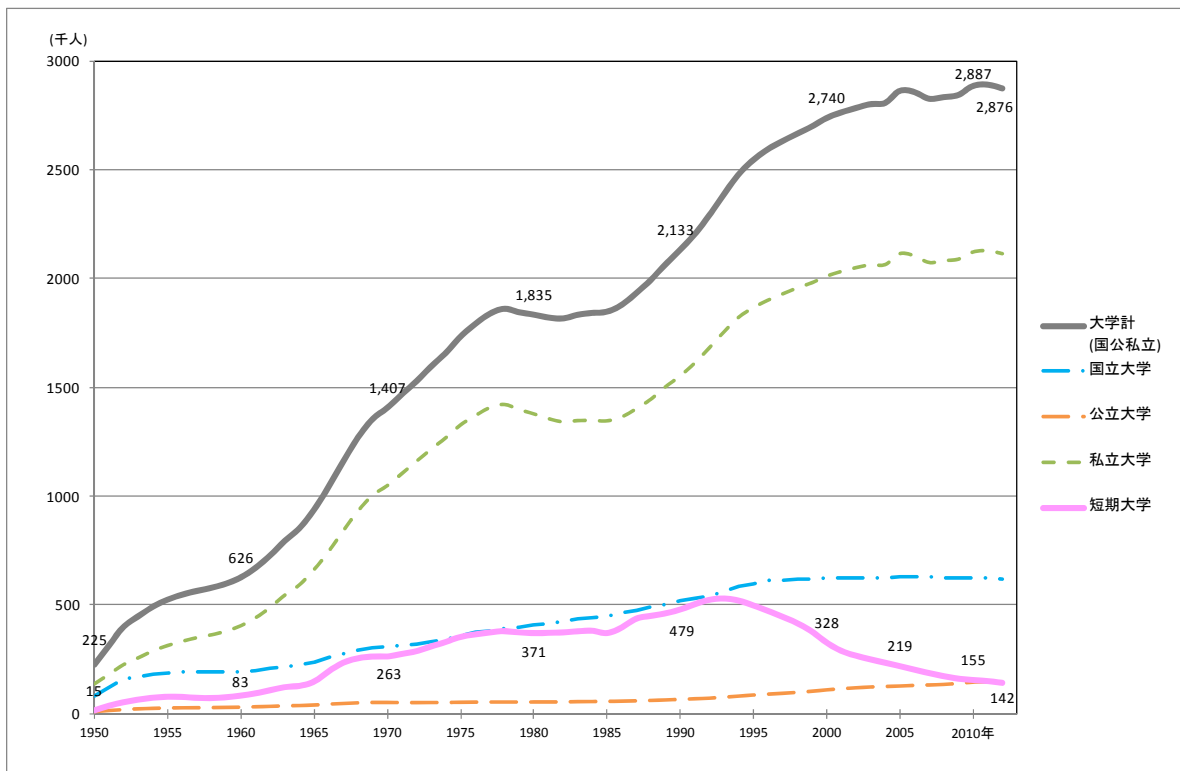
日本の大学は21世紀のグローバリゼーション、世界化にどう向き合うかが今、問われている。

大学・短期大学 学校数推移（1950～2012年）



資料：「日本の長期統計」「学校基本調査」より当研究所作成

大学・短期大学 在籍者数推移（1950～2012年）



資料：「日本の長期統計」「学校基本調査」より当研究所作成